



## 産科医の経験とホスピスケア(7)

医療法人パリアン理事長 川越 厚



### 自分の頭で考えよ

まだまだテーマに沿って書きたいことがあるが、次回より賛育会病院の院長としての経験と在宅ホスピスケアについて、連続で書きたいと考えている。“自分の頭で考えること”について触れ、今回で一応このテーマに沿った文章を終えたい。

今から40数年前、私が産婦人科で研修を始めた時、研修場所である東大産婦人科にもレーゲルと言われる約束事があった。レーゲルとは英語のルールに相当するドイツ語であるが、わかりやすく言えば“代々、医局内で口伝されてきたルール”、いわゆるガイドラインである。

研修医は先輩からこのレーゲルを叩きこまれるのであるが、幸いなことに、私の恩師の坂本正一教授、水野正彦教授はあまりこのレーゲルを私たちに強要しなかった。もちろん見当外れのことを行えば叱られたが、両教授ともそのような形よりも、むしろ考え方の筋道を大切にされた。いわゆる Gedankengang (思考過程) である。「君はどう考えたのかね？」ということをお診の際、僕たち研修医は厳しく問われた。

「自分がどう考えるか」と言うことは、僕自身、小さい時から自然に身につけていると勝手に思っている。多分、両親の教育が関係しているのだろう。

父はオルガンの名手であったが、私に直接教えてくれたのは1回だけ。それも拍子の取り方がわからないので、僕の方から質問したときのこと。父は黙って、その部分を弾いてくれた。英語も通訳するほどの人であったが、直接僕に教えてくれたことはなかった。だから、小さい時から、僕は問題を自分自身で考え、道を切り開いていたと思う。そのようなことは、僕も好きだった。

ところが緩和ケアに限らず、最近の医学教育は、とにかくガイドライン、プロトコル。なぜそうなるのか、を学生に考えさせるよりも、ガイドラインに乗った模範的な解答を覚えることに力が注がれている。問題である。

ホスピスケア、緩和ケアのリーダと言われている人たちの中には、世界の状況はよく勉強してよく知っているが、いざあなたはその問題に対してどう考えるのか、と言う質問をした時、文献的な考察をするのみで、まさに自分のデータも考えも無いように感じるのは、僕だけだろうか。もちろん、拙著「アクティブ・デス」で触れた、コクランのデータベースを否定するというわけではない。しかし、今一世を風靡している EBM あるいは EBN の問題



解決手法が、僕たちがテーマとしているホスピスケアのすべてではないことを知っておく必要がある。

文献に頼り、自分自身の考えがない研究者を、坂本、水野両教授とも、それから私の直接の指導教官であった川名尚教授も“総論屋”としてもっとも軽蔑していた。私もまったく同意見である。

このような素晴らしい環境の中で臨床を学ぶことができたのは大変幸せなことであり、今の仕事に大きく役立っている。朝のカンファレンスで若いドクターや看護師に注意している点、それは、「あなたはどう考えるのか」に尽きる。この大切なことを学んだのが、産婦人科の研修医時代である。

今回は産科医としての経験については触れていないが、機会があればこれらの問題にもいざれ触れたいと考えている。

<完>

## PCNS実習生、パリアンで在宅緩和ケアを実習

医療機関または訪問看護ステーションに勤務する在宅緩和ケアに関心のある看護師を対象とした、平成26年度の「緩和ケア訪問看護師教育プログラム」は、仙台開催に引き続き東京でも1月10日(土)、聖路加国際大学で開催され、受講した30名のうち3名が2月2日から6日までの5日間、パリアンで実習した。

実習生は、患者さん宅をパリアンの看護師に同行して、勤めている病院では体験できない在宅緩和ケアを実習体験した。その実習成果報告が2月6日にパリアン研修室で行われた。成果報告内容は下記の通り。



実習成果報告終了後の実習生の皆さんとパリアン看護師

### 病態悪化が進んできた時の余命告知の対応について

聖路加国際病院・看護師

80代の肺がんの男性で、奥さんの希望で本人に告知しないで療養生活をしている。本人は余命がそんなに長くないことは自覚しつつも数年は生きていたいと思っている。病院では食べたいものが制限されていたが、家では好きな物が食べられるようになって心が安定していると言っていた。

本人は思いつめる性格なので、余命告知をすると耐えられないと思われ、今の状態が続けば告知しなくてもいいと思うが、体調が悪化し病態が進んできた時にはどう対応したらいいのかと思う。

### 患者さんに向き合う姿勢について

国立がん研究センター中央病院・看護師

患者さんが家で見せる顔と病院で見せる顔は違うことを感じた。自分自身が患者さんの家に入っていて、緊張感を感じたので、患者さんが病院にいる間は緊張状態で過ごしているのではないかと感じた。病院にいる患者さんと家にいる患者さんは同じ患者さんなのに、入院している患者さんの人間的背景を捉えて、気にしていることを一緒に考えてあげられたら、また違うケアにつながっていくのではないかといろいろ考えるところがあった。

死と向き合う患者さんに対する看護師の姿勢とか対応の仕方を、今回の研修を通して学ぶ機会があった。いろいろな患者さんのケアを見たり聞いたりして、実践モデルにふれて、自分の中で実になったので、病院に戻ったら現場で見せて伝えていくということを大事にしていきたい。

### 感謝の言葉を言ってもらえる在宅ケアについて

JR東京総合病院・看護師

患者さんと訪問看護師との1週間の関わりの中で、初めの訪問では「くやしい」という発言だったが「ありがとうございます」に変わり「自分は幸せだ」に変わったことは、患者さんとご家族の思いや気持ちをそこまで変えたのは、ご家族をサポートした看護師や医師によるところが大きいと強く実感し、家族ケアの大事さを痛感した。

もともと病院では終末期看護や看取りのケアを希望していたが、自分の理想の看取りができないというジレンマを感じていた。パリアンに来て、患者さんの苦痛を和らげるためにはどうしたらいいのか、どういうふうに話を聞いたらいいのかということなど、まだまだ勉強しなければいけないと痛感した。

家で最期の時を過ごすことについて、まだ完全には覚悟はできていない状態でいろいろ不安になっている患者さんが、「夜眠れない」と訴えた。「奥さんが朝までいてくれるのだったらいいよね。安心だよね。」という訪問看護師の声かけがすごく新鮮に感じられた。病院では絶対に発言できないことで、睡眠薬を投与して眠らせてしまうだろう。

動けなくなった時に残された時間が短いと思うが、その中で「幸せだ、ありがとう」って患者さんが言ってくれることはすごいと思うし、それをサポートできる在宅ケアはすごいと思った。

# メモリアルツリーに故人への思いを書き、全員で「故郷」を合唱

## メモルの集い、8家族が出席して2月21日に開催

平成26年度第2回メモルの集いは2月21日(土)13時から2時間、8家族9人が出席されて開催された。

メモルの集いの開始直前に患者様の容体急変の緊急連絡が入り、川越医師は開会のあいさつを済ませて患者様宅に往診に出かけて行った。また、出席を予定していた平岩看護師も朝からずっと患者様宅を緊急訪問していて、閉会直前にやっと会場に顔を見せることができ、ご遺族と話すことができた。

メモルの集いは、ご遺族の自己紹介と患者さんを看取ってから過ごされた1年間の心境について各々話があった。途中、ボランティアによる詩の朗読があり、医師と看護師の2名が不在の中、ボランティアも話の輪の中に入り、ご遺族との分かち合いができていた。



会も中盤にさしかかり、次第に打ち解けて話を交わすご遺族

今回は自然と小さなグループに分かれ、それぞれ思い思いの話の輪に入って語り合っていた。メモリアルツリーの葉っぱに故人への思いを書き、「故郷」の合唱は声をだして歌ってくださったので、ご遺族は満足した時間を過ごされたことと思う。お帰りの時にはメモリアルカードと手作りボランティア作成のプレゼントをお渡しして散会した。

ご夫婦で作成していた家族通信「原村物語」

故人と二人で家族通信を作り続けたご遺族がいらっしゃった。通信名は「原村物語」「絆」。家族内の出来事や季節だよりなどのニュースが満載で、しかも切り抜き写真入りで紹介され、いかにも手作りらしく家庭的な温かさを感じる家族通信である。お二人で発行した最後の家族通信となった78号(左の写真)をここに紹介する。(掲載についてはご遺族承諾済)



## 「悲しみを乗り越えていく力を感じた」

看護師 千葉麻衣

9月に行われた第1回に続き、第2回の「メモルの集い」にも参加させていただきました。

パリアンに入職して1年半、今回の参加者には、私が新人だった頃に関わらせていただいた方もいらっしゃり、様々な場面が昨日のここのように蘇ってきました。

最愛の人を失うということ。それは、「80数年の人生、いろいろあったけれど、妻を失ったことがいちばん辛かった」というあるご遺族の言葉が表すように、人生最大の悲しみと言っても過言ではないと思います。故人を思い涙を流しながらも、同じ体験をしたご遺族同士で気持ちを共有したり励まし合う姿。「1年経ってだいぶ前向きになれた」と胸を張って報告するご遺族。そして、「家で看られて本当に良かった。これからも頑張る。」という看護師への応援の言葉。人は悲しみを乗り越えていく力があるということを改めて実感し、ご遺族一人ひとりがとても頼もしく見えました。

人生の締め括りの日々に関わらせていただけることに感謝し、これからもより良いケアを目指して頑張ろうと思います。

## パリアン公開定例カンファレンス開催のお知らせ

### テーマ「ひとり遺される家族へのケア～認知症の妻が遺された事例～」

日時：3月13日(金)18時~19時

会場：パリアン研修室(墨田区立川2-1-9KHハウス1階)

事例を通して、みなさんと一緒にこのテーマについて考えて行きましょう。どなたでもご自由に参加ください。(参加希望者はお名前、ご所属を右記へお送りください)

医療法人社団パリアン カンファレンス係  
Mail: conf@pallium.co.jp  
FAX: 03-5669-8310  
TEL: 03-5669-8302

## ラジオNIKKEI 日曜患者学校～川越厚の「がんからの出発」より

### 姫井葉子さんとの対談のあらすじ (3回目)

姫井さんが中学生の時の作文の中で、死に関する書物を読んだ感想として、「事実に基づいて書かれている本は、時として残酷だと感じた」と書かれている。当時の姫井さんがよく読んでいた本はファンタジーがある本であったので、起こっていることの衝撃とその後どうということが起こるかが目の前に浮かぶように解かってしまう死やがんに関する本は、そういう意味で残酷だと思ったという。



川越厚医師(写真左)と姫井葉子さん(同右) [ラジオNIKKEI「日曜患者学校～川越厚のがんからの出発～」より]

### 尊厳死は在宅ホスピスに似ていると思う

死ぬ権利について、当時の作文でこう述べている。

「安楽死は、患者が苦痛から逃れるために、医師が薬物を投与し意図的に命を縮めること、尊厳死とは、本人の意思で延命治療をしないこと、と言われている。尊厳死は、ホスピスや在宅ホスピスの考えに似ているといえるだろう。安楽死が合法化されているオランダや、合法化の動きがみられるいくつかの国では、「死ぬ権利」を尊重する欧米社会の考え方が反映されていると言えるだろう。「死ぬ権利」それは、不治の病を患っている患者達のひとつの選択肢、心のよりどころになると思う。(中略)自分で死を迎え入れるか、痛みと闘って生きていくかという2つの選択肢と向き合うことで、命の大切さを実感し、生きてみようという気持ちを心のどこかに見つけられる人がいるような気もするからだ。(中略)死を選ぶ人もいるだろう。でも、自分の正直な気持ちと正面からぶつかって、自分なりの答えを探していくことが私は大切だと思うのだ。」

姫井さんは現在でも死ぬ権利は尊重されるべきと思っているが、権利が悪用されることがないかとか、患者さんの悲しいとか辛いとか痛いとかという気持ちと死にたいという気持ちの線引きはどこにあるのかとか、どこまで国が制限をかけるべきなのかとか、いろいろな問題があるので、すぐに日本で死ぬ権利を認めるのは難しいと思うと語っている。

痛みや苦しみのために死を選ぶということは避けなければいけないし、これはホスピスケアが出来たきっかけでもあり、川越医師は言う。そもそもモルヒネとは、全ての人間が脳内モルヒネをもっており、嫌な事とか痛みとかの刺激を抑えているが、病気などでそのモルヒネの量が不足した時に、その不足分を薬で補うのが基本的な使い方、病状が進んできたら、その量を少しずつ上げていくことになるのだそうだ。疼痛緩和、呼吸苦緩和は、モルヒネをうまく使うことによって可能となる。姫井さんのお祖母ちゃんの場合は痛み止めとしてではなく、呼吸苦をとるための処方だったとか。

### 「より良く死を迎える」ということは、「より良く生きていくこと」

番組のエンディングは、子供だった姫井さんが愛する人の死をどのように受け止めたかについて、作文で下記のように述べていることを紹介して終わった。

「祖母の死、そして在宅ホスピスを通して、家族が一つになって協力し合うということを目の当たりにした。みんなの心から祖母を愛する気持ちをひしひしと感じたのだ。祖母は私達に色々なことを教えてくれた。食事をきちんと食べることがどれだけ大切か。家事をこなすことがどんなに大変か。感謝や思いやりの気持ち。家族や命の大切さなどを自分の死をもって教えてくれたと思う。そして、それが祖母から私達への最後の愛だったのだろう。川越医師のあの言葉は、私が祖母からの愛を気づききっかけを作ってくれたのだ。私はこれからの人生の中で、多くの生と死に出会っていくだろう。祖母の1年半の闘病生活を通じて、「より良く死を迎える」ということは、より良く生きていくことなんだ」と学んだ。祖母が亡くなってからもう1年半が過ぎたが、生と死というこの重いテーマは、私の中でまだ消化しきれしていない。これから生きていく中で、祖母が私に与えてくれたこのテーマを、じっくり考えていきたいと思う。」

### エジプト考古学者・吉村作治先生との対談は、3月8日と15日放送予定

- ・エジプト考古学者・吉村作治先生との対談の放送は、3月8日と15日2週連続の予定です。乞う御期待！
- ・放送の聴き方：短波放送・ラジオNIKKEI第1：3.925MHZ、6.055MHZ、9.595MHZ

放送終了後は、ラジオNIKKEIのホームページ(<http://www.radionikkei.jp/inochi/>)、または「日曜患者学校」で検索しても聴けます。

## 新人スタッフ紹介

### 貫井陽子 (看護師)

誕生星座：かに座

出身地：東京

趣味：映画鑑賞、旅行

ひとこと：

2月から入職しました貫井と申します。パリアンをテレビで知った時、自宅で穏やかに亡くなる姿を見て、自分が初めて患者さんの死に立ち会った時の事を思い出しました。

生後3ヶ月だった患者さんは、両親に抱っこされ、静かに亡くなりました。元気になって退院していく姿しか見ていなかった私は、初めて死を目の当たりにして衝撃を受けました。自分は人の大切な瞬間に立ち会う仕事をしていると、改めて実感しました。そして、一度しかない別れの時を、本人にとって、家族にとって大切な時間にできるような手助けをしたいと感じました。

その時の気持ちをテレビをきっかけに思い出す事ができました。緩和ケアもがん看護の経験



も乏しく、看護師としても未熟な私ですが、こうして皆さんと一緒に働ける事をうれしく思います。

これから、どうぞよろしくお祈りします。

### 富士岡尚子 (事務)

誕生星座：天秤座

出身地：東京

趣味：読書、お菓子作り、お花

ひとこと：

パリアンでは昨年の夏からボランティアとして参加させていただいておりましたが、この度、事務職として働かせていただくことになりました。皆様に温かく迎え入れていただき、本当に感謝しております。ボランティアの皆様もいつも温かく、優しく接してくださり、今までのように活動をご一緒できなくなるのが残念ですが、事務の面からサポートさせていただけるように励んで参ります。医療事務は初めてですので、毎日先輩方に教えていただくことばかりですが、早く仕事を覚えて、皆様の一員としてお役に立てるように努力して参りたいと思います。どうぞよろしくお祈りいたします。



## 27年度第1回ボランティアの集いは4月17日(金)18時から

「ボランティア・スタッフ懇親会&新スタッフ歓迎会」が4月17日(金)18時から台東区上野2-12-16池之端スカイビル5階「リバティハウス」で行われる。

18時からの30分間は、「平成27年度第1回ボランティアの集い」として、各ボランティアリーダーからの26年度活動報告と27年度活動計画及びメンバー紹介を行う。

出席できるボランティアはメール (volunteer@pallium.co.jp) ・電話 (03-5669-8302) ・FAX(03-5669-8310)にて連絡願います。万障お繰り合わせのうえ出席願います。

### 3月のボランティア活動予定

- ・訪問ボランティア：3月13日(金)午後2時30分～
- ・サロン・ド・パリアン：3月6日、13日、20日、27日
- ・手作りボランティア：3月24日(火)午後1時～
- ・事務&聞き書きボランティア：3月21日(土)午後1時～



今月の花 (芝田さん提供)

### 編集後記

2月21日、歌舞伎役者の10代目坂東三津五郎さんが59歳の若さで亡くなった。

2013年7月に健康診断ですい臓に腫瘍が見つかり、9月にすい臓と脾臓の摘出手術を受けた。術後の記者会見では初期のすい臓がんと言っており、周囲の人々は完治するものと思っていた◆2014年9月の定期検査で肺の異常が発覚した。その時、「体調不良で休養する」との報道で、肺への転移については否定していたが、本人へは告知していたのだろうか◆すい臓がんの8割はステージIVの状態で見つかり、治癒が期待できるステージIの状態で見られるのは1.7%、それでも5年後生存率は57%と言われている。◆パリアンの訪問診療を受けている80代の肺がんの男性の場合、奥様の希望でがん告知をしていないが、体調が悪化し病状が進んできた時、本人にどう告知するか対応が難しいと思う。川越医師は「真実を告げないまま死を迎えると心理的に不安定になり、人が信じられなくなることがあるので、それを見極めるのが医療者の視点である」という◆医療者からの治療の終了宣告は患者ご本人やご家族にとって辛いことではあるが、坂東三津五郎さんのように「先輩たちから預かった芸の荷物を後輩たちに引き継がなければ……」というような使命感をもっている方には真実を告げて、限りある日を思い残すことがないように生きてもらいたい (IE)